

異色の鹿児島女性 鹿児島芸者「新橋喜代三」の半生を追う

元KTS鹿児島テレビ放送・企画開発局長 米村 秀司



はじめに

鹿児島出身の芸者歌手「新橋喜代三」の名前はほとんど知られていない。

しかし鹿児島民謡「おはら節」を知らない人は鹿児島ではほとんどいない。

実は「おはら節」を全国ヒットさせた女性が「新橋喜代三」である。

鹿児島県種子島の出身で、大正から戦前にかけて鹿児島市の大門口にあった検番で芸者をしていた。

大門口での芸者時代、当時の作曲家中山晋平との出会いが喜代三の運命を変えた。

「てるてる坊主」「シャボン玉」など多くの童謡や流行歌を作曲した中山晋平は、昭和6年鹿児島商工会議所が主催した国産振興博覧会のテーマソング作曲の為、詩人の西條八十とともに鹿児島を訪れた。

そして喜代三は夜の宴席で中山と出会った。喜代三はその後、中山に呼ばれて上京。「新橋喜代三」の名前で芸者歌手としてデビューし「おはら節」や「明治一代女」などの数々のヒット曲を出した。昭和初期は芸者歌手ブームで、喜代三は赤坂小梅や小唄勝太郎と並ぶ芸者歌手として絶大な人気を集めた。また女優として映画にも出演。

中山貞雄監督の映画『丹下左膳余話・百万両の壺』では名優の大河内伝次郎と共に演じた。

戦災で中山監督の多くの映画作品は焼失した。しかし、『丹下左膳余話・百万両の壺』は戦災による焼失を免れた。出演している喜代三の動画映像は幸運にも今でも見ることができる。喜代三の独身時代の映像は美女女優と肩を並べる。

さらに喜代三の美声も聞くことができる。喜代三の歌った多くの曲は国会図書館の歴史的音源ライブラリーに保存されている。鹿児島県立図書館がこれらの音源を入手し広く県民へ公開することを願う。

新橋喜代三を追う

昭和12年12月、上京した喜代三は中山晋平と結婚。喜代三と中山の結婚は当時の新聞も「円盤会の女王 喜代三さん結婚 作曲家中山晋平氏と」という見出で大きく報道した。

昭和初期、中山が作曲した童謡「証城寺の狸ばやし」は多くの子供たちに歌われていた。「ショ、ショ、ショジョジ、ショジョジの庭に・・・・・」という歌詞のあの歌だ。

ところが、世界的な映画会社ディズニーは漫画映画で中山が作曲した童謡「証城寺の狸ばやし」を無断で使った。このため喜代三はアメリカに渡りディズニーとの著作権交渉を続けたが徒労に終わり、帰国した。

帰国後、喜代三は千葉県木更津市の証城寺に建立された記念碑の除幕式に出席した。

私は今年4月、証城寺を訪れた。証城寺の境内には狸塚や童謡碑が設置してあり、約70年前、喜代三が出席した除幕式の様子に想いを寄せた(写真1)。

その後同年6月、私は静岡県熱海市の梅園を訪れた。梅園内には中山晋平記念館がある。記念館は喜代三が中山と暮らした家をそのまま



写真1 証城寺の童謡碑



写真3 若いころの喜代三



写真2 中山晋平記念館

ま資料館として公開している。

2階建ての記念館には喜代三と中山のツーショットの写真や中山が作曲に使ったピアノ、さらに喜代三が使っていた鏡台が展示してある（写真2）。

昭和38年3月、喜代三は東京で死去した。鹿児島出身の芸者歌手で波乱に満ちた生涯だった。当時鹿児島市長を務めていた勝目清は地元紙の南日本新聞に喜代三の思い出を寄稿した。

喜代三は生前、自らの半生を自叙伝として上梓していた。

私はこの自叙伝の初版本を宮城県の古書店から入手したが、初版本には喜代三の若いころの写真（17歳から45歳まで）がグラビアとして17点掲載されている（写真3、4）。全盛時の喜代三の姿を想像できる。また自叙伝には当時の著名な歴史作家、吉川英治が序文を寄せている。

吉川氏は序文で「自分の歩いてきた苦闘の



写真4 新橋喜代三

人生を大胆率直に書き、明治、大正、昭和の歌謡界の側面史でもある」と書いている。

喜代三の自叙伝は戦前の鹿児島の芸能や文化について、既存の歴史書では知ることが出来ない世界が、芸者の視点で生々しく描かれている。いわゆる鹿児島女性の「裏文化の歴史書」である。私は数年前から、新橋芸者「喜代三」の生涯に关心を寄せている。

喜代三の略歴

昭和38年3月23日、59歳で亡くなった喜代三の生涯を簡潔に紹介する。明治36年10月12日、喜代三は鹿児島県種子島で生まれた。本名は

今村タネ。生後まもなく鹿児島市に移住。父親は鹿児島市上町の鹿児島駅近くで旅館業を始めたが、大正3年の桜島大爆発のころ懇意の女性と逃亡した。

喜代三は母親を助けるため小学校を4年でやめ、芝居小屋の売り子となる。

やがて父親が帰ってくるが苦しい生活が続く。父親が開業する食堂の開業資金をつくるため、大正5年、鹿児島市で芸者になり「八重子」と名乗る。

しかし父親の借金が膨らんだため、大正7年台湾に渡り、台南市で芸者を始めた。台湾では「鳶奴」(つたやこ)と名乗り、日本を代表する写真家、木村伊兵衛と出会い結婚の約束をした。しかし別れる。その後、台湾から鹿児島に戻り「喜代治」と改名して芸者を続けた。結婚を約束した木村伊兵衛は土門拳と共に後年、カメラマンとしての名声を高めた。『木村伊兵衛写真全集』第1巻には喜代三の顔写真が掲載され、キャプションには「芸者」と表示されているが喜代三の実像で、台湾時代に撮影されたものだ。

昭和6年、鹿児島市鴨池で開かれた国産振興博覧会で東京から鹿児島を訪れた政財界の知名士たちは夜の宴席で毎晩のように喜代三をお座敷に呼んだ。

知名士のなかには政友会の幹事長松野鶴平(まつの つるたい)や鹿児島出身の実業家保野健輔らがいたことが喜代三の自叙伝に書かれている。

喜代三を座敷に招いた知名人（自叙伝より抜粋）

喜代三が鹿児島在住時代に、お座敷に呼んだ主な有力政財界人の略歴をまとめて紹介する。

松野鶴平は熊本県出身で鉄道大臣や参議院議長などを務めた政治家。

保野健輔は鹿児島県出身の実業家で飯野海運の社長を務めた。

現在の鹿児島県立体育館の建設に際して多額の寄付をおこなった。

上杉慎吉は明治後期から昭和初期にかけての日本の憲法学者で天皇主権説を主張。血盟団事件で逮捕された七高生の四元義隆らの精神的な支えだった。上杉慎吉の鹿児島訪問の目的は不明だが、昭和7年血盟団事件が起き四元ら七高生が逮捕された。上杉の鹿児島訪問は血盟団事件での四元逮捕と関係する、と推察する。

大倉喜七郎男爵は大倉財閥の創始者の長男で、ホテルオオクラや札幌の大倉山スキージャンプ場など数々の資産を残している。

渋沢栄一は明治から昭和初期にかけての日本の実業家。著書の『論語と算盤』では西郷隆盛に経済の重要性を示し、西郷の主張を論破したことが書かれている。

大川平三郎は渋沢栄一の書生で、後年王子製紙などを経営し日本の製紙王と呼ばれた。

野口雨情は詩人で、北原白秋や西條八十とともに多くの童謡を作詞した。

喜代三の実像証言と本人のインタビュー録

『講座日本映画第3巻』に掲載してある「山中貞雄監督の想い出」のなかで当時の人気映画女優の深水藤子(ふかみずふじこ)（日活時代劇のスター女優）が映画監督の新藤兼人と対談し、『丹下左膳余話・百萬両の壺』の撮影裏話を次のように語っている。

深水：『丹下左膳余話・百萬両の壺』の矢場の場面は同時録音したのです。セットに楽団を入れました。そうすると喜代三さんが冷酒をパッとお飲みになって歌うのです。山中監督も飲んでいるし、喜代三さんも飲んでいるし、とても楽しい撮影でした。テーマソングのほかに喜代三さんへ何か歌いなさいと監督が言ったりしました。すると喜代三さんも一生懸命に歌いました。

新藤：喜代三さんは役者でもないのに、実に生き生きとしていましたね。

（『講座日本映画第3巻

山中貞雄監督の想い出』傍線は筆者）

『週刊サンケイ』は昭和31年12月9日号でジャーナリスト阿部真之介がアメリカ帰りの喜代三のインタビュー録を掲載した。喜代三の唯一残されたインタビュー録である。抜粋して紹介する。

阿部：アメリカにはどれくらいですか。
喜代三：4月21日に出国しましたので、ちょうど半年と15日いました。

阿部：どのあたりを回られたのですか。
喜代三：4～5か所ははっきりしていますが、同じような名前ばかりで……サンの名前が付く町が多いことにびっくりです。

阿部：西海岸にはサンフランシスコ、サンディエゴがありますね。

アメリカから帰国してどれくらいになりますか。

喜代三：まだ10日目です。

阿部：今度のアメリカ行きは印税問題ですか。

喜代三：もちろん「証城寺の狸囃子」の印税のこともあります。私は昨年あたりからモヤモヤしたつまらない気持ちがあったのでアメリカへ行く事で吹っ切れるのではと思い、決断しました。仏壇の中山の写真に誓って出掛けて行ったわけです。

私の今度のアメリカ行きはアーサーキッドに会うのも目的だったので縫いぐるみの狸を持っていきました。アメリカに着いてまもなくRCAを訪ねました。すると「アーサーキッドは今ドイツに行っている。いつ帰るかわからない」と言うことでした。

阿部：証城寺の印税問題はRCAでは分からぬのかなあ。

喜代三：印税問題はサザン・ミュージック（筆者・日本の著作権協会にあたる）が権利をもっているのでそこを介して話したわけです。しかしディズニーと会い、話をして欲しいということになったのです。

その後アメリカ各地を回り、ラスベガスにも立ち寄ったら「アーサーキッド公演」

という看板が出ていました。

ラスベガスの町の賭博場へ行ったら、そこでバッタリ、アーサーキッドに会ったのです。アーサーキッドは胡坐をかいた姿勢で椅子に座っていました。全くの偶然の出来事でした。アーサーキッドから「今日は午後8時からの出演だから見に来てください」と言われ、8時前に劇場へ行ったら舞台の近くに私たちの席が準備してありました。

その日の司会者はアメリカで有名なマイロン・コーンで「今夜はゲストが3人います」とスピーチし、一人目はデンバーのドクター、二人目がジャーナリスト、三人目は誰かと思っていると「キヨゾー」と紹介するのです。驚いて立ち上がったラストライトが当てられました。その後アーサーキッドの舞台を見て、一緒に記念撮影をしました。帰り際にアーサーキッドの自叙伝を頂きました。

阿部：あなたはあちこちで在米日本人に歓迎されたようですね。

喜代三：サンフランシスコで鹿児島出身者の結婚式に出ました。披露宴会場で三味線を弾いて「高砂やこの浦船に帆をあげて、月もろともに出で……」と歌ったら皆さんに喜んで頂きました。

阿部：あなたが結婚式に招待されたのは日本から来た芸能人ということからですか。

喜代三：それもあるかもしれません、私が鹿児島出身ということからです。

（『週刊サンケイ』昭和31年12月9日号から抜粋）

喜代三の死と鹿児島市長、勝目清の追悼記事

喜代三は昭和38年3月23日、東京の聖路加病院で死去した。59歳だった。

南日本新聞は翌3月24日、喜代三の死亡記事を顔写真付きで報道したが、葬儀の日程は未定と報道している。この時、すでに中山晋平は死去し、喜代三には血縁の親族がいなかつ

た、と推察する（写真5）。

喜代三の葬儀がいつどのような形で行われたかは不明であるが、喜代三は東京府中市の多磨霊園にある中山家の墓地で眠っている。

同年3月25日、鹿児島市長、勝目清は追悼記事「思い出のおはら節」を南日本新聞に寄稿した。

勝目清氏の寄稿記事を抜粋して紹介する。

中山喜代三さんが亡くなったそうだ。びっくりした。病気だということも知らなかつたし、アメリカなどへも行つていたようだから、こんなに早く亡くなろうとは思いもしなかつた。初めて喜代三さんを知つたのは大正末頃だった。

鹿児島には芸者の検番が南検番と西検番の二つあった。

松原町の大門口を南検番と称していたが喜代三さんはこの南検番にいた。明朗で明敏な性格の持ち主でいまだに私の脳裏には喜代三の怒った顔の印象は少しもない。いつもニコニコ顔だった。150人位いた芸者のなかでも喜代三は芸達者な方で特に唄が得意だった。

一番思い出深いのは「おはら節」である。元来「おはら節」は芸者の芸事としては余り尊重されていなかったので、正式な宴会などでは南検番の芸者は披露しないものだった。長唄、清元、常磐津のような芸事は披露するが、「おはら節」や「はんや節」は芸者の沽



写真5 壱代三死亡記事

券にかかるので歌わないものだった。

「おはら節」は余程、座が乱れた後か、別座で少人数の時に客の所望により披露するものだった。

その後しばらくして喜代三さんは上京し、新橋喜代三の名前で「おはら節」をレコードに吹き込み、日本全国に「おはら節」を広めた。

東京での県人会の時も喜代三さんはよく出てきて「おはら節」を聞かせてくれた。中山晋平夫人になってからも渋谷駅のプラットホームで偶然会ったこともあった。

先年、帰鹿された時、昔の南検番の芸者らと話したことがあったが、あれが喜代三さんとの最後であった

喜代三の波乱に満ちた生涯は、現在ほとんど知られていない。

鹿児島の歴史研究は相変わらず島津家関連、西郷隆盛、明治維新に偏っている。少なくとも私がメディア（KTS鹿児島テレビ放送）の世界に入って30年以上は続いている、と思う。歴史家が発表する島津家関連、西郷隆盛、明治維新などの研究は「どれも似たり依ったり」である。新発見が乏しい。加えてこれらは「勝者や権力者側」の記録から発表され、「敗者や負の歴史」が研究対象から除外されているように思える。

昨年、鹿児島中央駅前の「若き薩摩の群像」に、群像から除外されていた留学生二人がようやく追加建立されたことも、そのことを物語っている。

群像が建立された昭和57年から40年間、除外された二人の留学生は顕彰されなかった。

鹿児島では明治以降の偉人の研究や検証が遅れ、これらの偉人が歴史から埋没されている。これは歴史家を含めて鹿児島のメディアにも責任があると思う。

ジャーナリズムは「歴史の発掘と記録保存」も責務の一端である。